

S-HTPP 法の人物像表現に投射される対象関係特徴の検討 - S-HTPP 法の人物像の特徴とロールシャッハ法の対象関係指標との比較 -

中京大学心理学部 近藤 孝司

Relation of object relations in S-HTPP method and Rorschach

KONDO, Takashi (School of Psychology, Chukyo University)

S-HTPP is the drawings method which assess the object relations which draw "a house, a tree, a male, and a female" on one sheet of paper. The purpose of this study was to examine the object relations on S-HTPP method, through the relation to Rorschach method. The author set up the four indexes of object relations of Rorschach method below. 1. types of human responses(H, Hd, (H), (Hd)), 2. elaboration (description of features attributed to human), 3. interaction of human/animal responses, 4. human movement response. Subjects were 37 adolescents (6 males, 31 females, 21.08 years old of average age). The relation between the expression, direction of figures on S-HTPP method and the index of object relations of Rorschach method. This result suggested that the object relations on S-HTPP method and Rorschach method were comparatively same nature, and S-HTPP method is useful to assessment of the object relations.

Key words: S-HTPP method, Rorschach method, human response

序論

臨床場面において自己と他者との関係性は重要な概念であり、精神分析では対象関係 (Object Relations) という概念を使って論じられることが多い。対象関係は学派によって捉え方が微妙に異なってくるが、広義には「現実の行動や態度を規定する内的世界における自己と対象との関係」と定義されている (藤山, 2002)。この対象関係の概念は、臨床心理学的介入において重要な意味をもっている。この対象関係のアセスメントに、質問紙法、投映法、面接法などが使用されてきた。なかでも意識化の困難な水準が測定可能で、精神分析との理論的な親和性の高い投映法、特にロールシャッハ法 (以下、口法) と描画法によって盛んに研究されてきた。以下、口法と描画法における対象関係のアセスメントの研究を概観する。

1. 口法による対象関係のアセスメント

口法に関して、多くの研究者が様々な理論や基礎研究に基づく尺度を開発してきた。その代表に Urist (1977) の Mutuality of Autonomy Scale

(以下、MOAS) と、Blatt et al. (1976) の Developmental Analysis of Concept of the Object Scale (以下、DACOS) がある。

MOAS は、自我心理学、自己心理学、分離 - 個体化理論に基づく尺度である。「熊が2匹、踊っている」といった複数の人間、動物、非生物反応を評定対象とし、反応間の相互作用や関係性に注目して、協力的から破壊的の7段階で評定する。この尺度は、複数反応間の情緒的な意味づけに注目する。そのことから、情緒発達や重要他者との愛着形成といった、対象関係の情緒面に焦点をおいた尺度であるといえる。今までに、MOAS は、病態水準の弁別に関する研究や (Harder et al., 1984)、児童や小児期の情緒発達に関する研究 (Ryan et al., 1985; Tuber & Coates, 1989; Goddard & Tuber, 1989) に用いられてきた。

DACOS は、自我心理学と Piaget の理論に基づく尺度である。Blatt et al. は、対象関係は、外界との関わりを通じて、対象表象と認知機能が未分化から分化へ、未統合から統合へと発達することを理論的な原則とし、それらが人間反応に表れると仮定した。評定方法は、まずはじめに、インクプロット

の特徴を正確に知覚しているか (F+)、していないか (F-) に分け、次に人間反応の分化の程度 (H, (H), Hd, (Hd)), 分節化の程度 (人間の属性についての言及), 相互作用の程度に関する4項目 (相互作用の内容や程度) の合計6項目から反応を評定し、得点を加算していくというものである。この合計得点が対象関係の発達指標となる。このDACOSは、その人間反応が正確に知覚されているか、全体か部分か、どれほど明細化されているか、能動的か受動的かといった対象関係の認知面に注目する。また人間反応間の相互作用に悪意が込められているかどうかを評定対象に含めており、MOASほどではないが、対象関係の情緒面も視野に入れている。健常群、不安障害群、境界例群、統合失調症群、情緒障害群などを対象にした研究では、DACOSを用いることでその群に特有な認知機能と人間表象の特徴をアセスメントすることが可能であることが報告されている (Lerner & Peter, 1984; Blatt & Lerner, 1984; Lerner, 1983; Spear & Lapidus, 1981)。

MOASとDACOSは、情緒面と認知面という、対象関係の特定の側面のアセスメントに有用な尺度である。しかし、一方の尺度を使えば、もう一方の尺度が注目する対象関係の側面を無視してしまう可能性がある。そこで高瀬 (1999) は、両尺度を包括した研究を行った。高瀬は、MOASとDACOSの指標を、人間反応タイプ (H, (H), Hd, (Hd)), 明細化 (人間の属性に関する言及), 相互作用 (人間・動物像間の関係のあり方) の3つに包括した。高瀬は、健常群、不安障害群、統合失調症群における各指標の特徴を調べた結果、不安障害群は人間形態の認知は正確だが明細化と相互作用が乏しく、統合失調症群は不適切な結合と主観的な解釈をした相互作用が多いということを報告した。このことから高瀬は、MOASとDACOSの指標は、対象関係をアセスメントする上で欠かすことはできないと結論づけている。

反応間の相互作用以外で、対象関係の指標として有用なものに、人間運動反応 (以下、M反応) がある。曖昧なインクプロットに運動性をもった人間像を知覚するM反応には、思考障害 (Berg et al., 1993), 創造性 (Bonifacio & Schaefer, 1969), 共感性 (Bochner & Halpern, 1945) など様々なパーソナリティ変数が投射され、対象関係もその中に含まれることが知られている。実際に、MOASと

DACOSの評定対象となる反応のほとんどには、M反応が含まれている (Stuart et al., 1990; Lerner & Peter, 1984)。またM反応を、「踊る」や「ケンカする」など動的・能動的に知覚するか (Active), 「座る」や「話す」など静的・受動的に知覚するかには (Passive), 対人場面における行動傾向が表れるとされている (Exner, 1986/1991)。つまり、Activeは積極的で能動的な対人行動を、Passiveは消極的で受動的な対人行動を表している。このように、M反応およびActive-Passiveの概念は、被検者の対象関係特徴をアセスメントする上で重要な指標であると考えられる。

2. 描画法による対象関係のアセスメント

描画法において、対象関係の表れやすい技法に人物画がある。1枚の画用紙に人物像が描かれるとき、その人物像には自己像や他者像が投射され、その人物像の顔、目、手といった外界との接触に関する体の部位に、対象関係や他者への態度が投射されると言われている (Machover, 1949/1984)。また、1枚の画用紙に複数の人物像が描かれる場合、一方には自己像が、もう一方には他者像が投射され、両者の関係付けの表現には、自己と他者の関係性のあり方が投射されやすいとされ、その仮定をもとに、人物二人法 (安藤, 1990) や母子画 (Gillespie, 1994/2001) が提案された。

近藤 (2006) は、これを応用し、対象関係のアセスメントに適した技法として、1枚の画用紙に「家・木・男の人・女の人」を描くS-HTPP法 (Synthetic-House Tree Person Person test) を提案した。これは、「家・木・人・反対の性別の人」を1枚ずつに描くHTPP法 (Hammer, 1969; 高橋, 1974) と、「家・木・人」を1枚に描くS-HTP法を統合させた技法である。1枚に「家・木・男の人・女の人」のアイテムを描くことで、人物像の相互作用が描かれ、ここに対象関係が投射されると考えられる。近藤 (2009a) は、S-HTPP法の人物像の特徴と対象関係尺度 (井梅, 2001) との関連を調べた結果、「表情」、「視線」、「身体接触」、「描画後の質問 (post-drawing interview: 以下、PDI)」に対象関係が投射されることを報告した。また、S-HTPP法の人物像の特徴と自己愛傾向・対人恐怖傾向との関連を検討した結果、「表情」、「顔の向き」、「身体接触」、「人物像の関係性」、「PDI」で有意な関連が示され、一方で描線や筆圧といった人物像以

外的特徴では有意な関連は示されなかった (近藤, 2009b)。これらから, 人物像の特徴が, 対象関係をアセスメントする上で有用な指標になると考えられた。

しかし, これら一連の検討は質問紙法を用いて行われている。一般的に, 投映法には, 被検者が産出した反応を十分意識している面も, 被検者が意識していない面も, その両方が表れる。他方, 質問紙法は, 自己評定に基づいているため, 被検者の意識している面が強く表れる。このように投映法と質問紙法とでは, アセスメントの意識水準が異なるため, 先行研究の妥当性に課題が残り, 他の投映法との検討が必要である。

そこで本研究は, 口法の間人反応と M 反応を対象関係の指標として取り上げ, これらの指標と S-HTPP 法の人物像の特徴とを比較し, S-HTPP 法の人物像に投映される対象関係特徴の検討を行う。

方法

1. 調査協力者

A 県内の心理学関係の学部・研究科に在籍する大学生・大学院生 37 名 (男性 6 名, 女性 31 名, 平均年齢 21.08 歳)

2. 材料と教示

S-HTPP 法 八つ切判の画用紙, B4 の鉛筆, 消しゴムを用意し, 画用紙を横向きに置いた状態で, 「この 1 枚の画用紙に, 家と木と男性と女性をいれて, 何でも好きな絵を描いてください」という教示で実施した。棒人間でもいいか, 何人でもいいかななどの質問があれば, 極力「自由でかまいません」と回答した。

PDI 「この男性/女性は今, 何をしていますか」, 「この男性/女性は何を考えていますか, 今の気持ちは何ですか」, 「男性/女性は相手に, どんな気持ちや考えを抱えていますか」, 「この男性と女性はどういう関係ですか」と自由記述式の質問を設定した。

口法 10 枚の図版を全て用いて実施した。free association 後の inquiry は, 人間が登場, および登場すると推測される反応, 複数の人間・動物間の相互作用が登場, および登場すると推測される反応に限って実施した。なお 37 名の総反応数の平均は 31.62 であった。

3. 手続き

講義にて調査協力者を募集し, 同意を得た上で, 個別式で実施した。はじめに S-HTPP 法を実施した後, PDI の用紙を配布し, 記入を求めた。その後, 口法を実施した。要した時間は 1 時間前後である。

4. 結果の処理法

S-HTPP 法 馬場 (2005) を参考にして, 人物像の特徴の分析項目を作成した (表 1)。「表情」と「顔の向き」は, 同性像, 異性像, 同性像と異性像の組み合わせのそれぞれについて, 分析した。「表情」について, 笑顔ではない複雑な感情が入り混じった表情が描かれ, 明確な判別が困難であった表情は「非笑顔」と分類した。また後ろ向きのため表情が評定できない描画は, 「表情」の分析の際には除外した。「顔の向き」について, 表情が空白であったりして判別不能な描画は, 「顔の向き」の分析の際には除外した。「視線」の「視線なし」は表情が省略されたりして判別が不能な描画を指す。「関係性」は, 「この男性と女性はどういう関係ですか」の PDI から評定した。「人物像の相互作用」は, 全ての PDI から評定した。「人物像の表現様式」と「人物像の相互作用」の判定基準の詳細は表 1 に併記する。これらの項目のうち, 「表情」と「人物像の相互作用」は, 著者と大学院生 1 名とで個別に評定し, 一致しない項目は協議し再度評定した。それ以外の項目は, 著者が単独で評定した。

口法 高瀬 (1999) と Exner (1986/1991) を参考にして, 人間反応と M 反応の分析項目を作成した (表 2)。各項目の評定基準と例を表に併記する。人間反応タイプと M 反応の評定は片口法を採用した。人間・動物反応の相互作用では, 動物反応を含めている。なぜならば, 「熊が手を取り合っている」というように, 複数の動物の間で何らかの相互作用が展開される反応は多く, 対象関係をアセスメントする上で有用な材料になると判断したからである。現に, MOAS は 2 体の動物反応を評定対象に含めている。人間・動物反応の相互作用と M 反応における Active-Passive の分類は, Exner (1986/1991) を参考に, 「話す」を Passive, それ以上の活動性を持つ反応を Active と判定した。評定について, 投映法の基本的知識をもつ大学院生 1 名と著者とで個別に評定し, 一致しない項目は協議の上, 再度評定した。評定対象となった反応は合計

表1 S-HTPP法の分析項目

表情	笑顔, 非笑顔, 空白の表情
顔の向き	正面向き, 横向き, 後ろ向き
視線	対面, 同方向, 一方向, 別方向, 視線なし
身体接触	抱く, 手をつなぐ, 接触なし
人物像の表現様式	普通の人間: 髪や顔, 服装が描かれ, 簡略化がされていない
	棒人間: 人物像の体や顔を一本線や円で簡略に表現している
	空白の人間: 人物像の輪郭線のみで, 中が何も描かれていない
関係性	夫婦・恋人, 友達, きょうだい, 親子, 知り合い・近所の人, 関係性のない人, 言及なし
P D I 人物像の相互作用	相互的: 男性像と女性像の両者が, 個人として自律し, 行為や感情を共有している
	並行的: 行動だけ共有し, 感情の共有がないなど, 相互性の強調がないが, 否定でもない
	アンビヴァレント: 一方の感情が否定的であったり, 互いが相手に抱いている感情が異なったりして, 葛藤や接近・回避を含んだ関係性
	一方向的: 一方は関わりを示していないが, もう一方が関心を示している相互作用
	相互作用なし: 行為や感情の共有がみられない

馬場 (2005) を参考に作成

表2 口法の分析項目

		評定基準	例
人間反応 タイプ	H	全身あるいはほぼ全身を含む現実的な人間	全体で人
	Hd	現実的な人間の部分のみに関する反応	人の手
	(H)	全身あるいはほぼ全身を含む非現実的な人間	天使, パットマン
	(Hd)	非現実的な人間の部分のみに関する反応	巨人の手
	H合計	H, Hd, (H), (Hd)	人間反応の総計
人間反応 の明細化	性別	人間反応の性別, または性別を推測できる言及	おじいさん
	年齢	人間反応の年齢, 発達段階に関する言及	子ども, 老人
	社会的属性	人間反応の人種や職業など社会的な属性の言及	芸能人, 黒人
	衣類・髪型・体型	人間反応の衣類, 髪型, 体型に関する言及	スカート, ポニーテール
	性格	人間反応の性格特徴に関する言及	怖い人, やさしい人
	言及なし	上記の項目に関する言及がない	人間
	複合	「言及なし」以外の上記の項目が2種類以上含まれている言及	スカートをはいた歌手
人間・動物 反応の 相互作用	Activeな相互作用	2者以上の反応の相互作用が積極的, 能動的である	2人で手を合わせて踊っている
	Passiveな相互作用	2者以上の反応の相互作用が消極的, 受動的である	2人が向かい合っている
	攻撃・敵意・損傷	2者以上の反応の相互作用が攻撃, 敵意, 損傷と関連している	ケンカして, 血を流している
	相互作用なし 鏡映反応	2者以上の反応がみられるが, 相互作用に関する言及がない 2者以上の相互作用反応が鏡映に関するもの	2匹の獣が岩を登っている 湖面に映る人
M反応	Active	積極的, 能動的な人間運動反応	踊る, 手を合わせる, にらむ
	Passive	消極的, 受動的な人間運動反応	話す, ささやく, 見る
	M合計	M反応の合計	

高瀬 (1999), Exner (1986/1991) を参考に作成

で424個であり, 1人あたりの平均は11.46個であった。この反応のなかには, 複数の分析項目に該当するものがある。

結果と考察

1. S-HTPP法と口法の分析項目の出現率

S-HTPP法の人物像の特徴について, 各項目の出現度数と出現率を表3に示す。また比較のため, 著者の先行研究(近藤, 2008)の出現率を併記する。S-HTPP法における平均的な人物像表現は, 笑顔

表 3 S-HTTP 法の分析項目の出現度数と出現率

		本研究		先行研究 (近藤, 2008)
		度数	出現率 (%)	出現率 (%)
表情 (同性像)	笑顔	19	52.8	46.1
	非笑顔	8	22.2	24.2
	空白の表情 9	25.0	29.7	
表情 (異性像)	笑顔	24	66.7	43.1
	非笑顔	4	11.1	27.1
	空白の表情	8	22.2	29.8
表情 (同性像 - 異性像)	笑顔 - 笑顔	19	54.3	40.2
	笑顔 - 非笑顔	0	0.0	6.5
	非笑顔 - 笑顔	4	11.4	3.3
	非笑顔 - 非笑顔	4	11.4	20.1
	非笑顔 - 空白の表情	0	0.5	
	空白の表情 - 非笑顔	0	0.0	0.5
	空白の表情 - 笑顔	0	0.0	0.5
	空白の表情 - 空白の表情	8	22.9	28.5
顔の向き (同性像)	正面向き	25	78.1	74.5
	横向き	6	18.8	21.4
	後ろ向き	1	3.1	4.1
顔の向き (異性像)	正面向き	24	72.7	69.7
	横向き	9	27.3	25.8
	後ろ向き	0	0.0	4.5
顔の向き (同性像 - 異性像)	正面向き - 正面向き	23	71.9	68.2
	正面向き - 横向き	2	6.3	7.2
	正面向き - 後ろ向き	0	0.0	1.5
	横向き - 正面向き	1	3.1	0.0
	横向き - 横向き	5	15.6	19.0
	横向き - 後ろ向き	0	0.0	1.5
	後ろ向き - 横向き	1	3.1	0.0
	後ろ向き - 後ろ向き	0	0.0	2.6
視線	対面	5	13.5	20.7
	同方向	22	59.5	59.2
	別方向	4	10.8	4.5
	視線なし	6	16.2	15.6
身体接触	抱く	0	0.0	0.9
	手をつなぐ	11	29.7	25.6
	接触なし	26	70.3	73.6
人物像の表現様式	普通の人間	32	86.5	80.6
	棒人間	4	10.8	14.5
	空白の人間	1	2.7	4.8
関係性	夫婦・恋人	25	67.6	62.6
	友達	6	16.2	12.8
	きょうだい	3	8.1	9.7
	親子	2	5.4	0.4
	知り合い・近所の人	1	2.7	9.3
	言及なし	0	0.0	5.3
人物像の相互作用	相互的	27	73.0	40.8
	並行的	2	5.4	24.5
	アンビヴァレント	3	8.1	5.1
	一方向的	1	2.7	9.4
	相互作用なし	4	10.8	19.7

で正面を向き、現実的な姿に近い形をしている人物像というものであった。また PDI では、男女は夫婦・恋人で、相互的な関係にあると言及されるがこ

とが多かった。先行研究と比べると、「人物像の相互作用」について、本研究では、「相互的」が多く、「並行的」が少ないが、それ以外の項目で顕著な差

表4 口法の分析項目の平均度数と平均出現率

		平均度数		平均出現率 (%)	
		本研究	高瀬 (2005)	本研究	高瀬 (1999)
人間反応タイプ	H	4.1	-	11.7	13.8
	Hd	3.5	-	9.1	6.6
	(H)	1.8	-	5.6	3.9
	(Hd)	1.6	-	4.6	3.5
	H 合計	9.4	-	30.9	27.9
人間反応の明細化	性別	2.6	-	2.7	2.0
	年齢	1.5	-	2.7	0.3
	社会的属性	3.5	-	2.7	1.7
	衣類・髪型・体型	4.3	-	2.7	0.7
	性格	2.1	-	2.7	5.1
	言及なし	3.7	-	2.7	5.1
	複合	3.6	-	12.0	13.0
人間・動物反応の相互作用	Active な相互作用	2.6	-	7.7	7.4
	Passive な相互作用	1.7	-	3.4	5.8
	攻撃・敵意・損傷	1.2	-	1.1	0.9
	相互作用なし	2.5	-	7.9	1.7
	鏡映反応	1.1	-	1.3	0.6
M 反応	Active	4.6	2.8	15.3	-
	Passive	2.5	1.6	7.6	-
	M 合計	7.6	4.4	23.3	-

はみられなかった。

口法の分析項目について、平均度数と総反応数で割った平均出現率を表4に示す。また比較のため、高瀬(1999)の健常群(合計70名、男性42名、女性28名、平均年齢は30.5歳)の人間反応平均出現率を、高瀬(2005)の健常群(合計87名、男性47名、女性40名、平均年齢は28.6歳)のM反応平均度数を併記する。表4から、口法の人間反応タイプ、明細化、相互作用の項目について、本研究と高瀬(1999)に大きな違いはみられなかった。しかしM反応について、本研究の値は、高瀬(2005)よりいくらか高かった。これは調査協力者の性別の構成比の違いに由来していると考えられる。角田・小川(2005)は、M反応数の性差に有意傾向があり、大学生の男性よりも大学生の女性の方が多いいことを示している。本研究の調査協力者に占める女性の割合は高く、そのため高瀬(2005)のデータよりもM反応数が多くなったと考えられる。また、本研究の調査協力者が心理学関係の学部・研究科の学生であることも影響していると考えられる。

2. S-HTPP法と口法の分析項目の関連

S-HTPP法の描画特徴の下位項目ごとに、口法の分析項目の平均出現率の差異を検討した。S-HTPP法の項目について、「顔の向き(同性像)」の「後ろ向き」、「顔の向き(同性像-異性像)」の

「正面向き-横向き」と「横向き-正面向き」、「後ろ向き-横向き」、「人物像の表現様式」の「空白の人間」、「関係性」の「親子」と「知り合い・近所の人」、「人物像の相互作用」の「並行的」と「一方向的」は度数が極端に少ないため、統計処理では除外した。口法の反応数に調査協力者による差異があるため、統計処理には、各人の分析項目の反応数を総反応数で割った値を用いた。なお、3項目以上の比較にはKruskal-Wallis検定を、その残差分析にはMann-Whitney検定を用いて対比較を行った。2項目の比較にはMann-Whitney検定を用いた。この統計処理法を用いたのは、口法の分析項目の反応分布が正規性をもたないためである。以下に、人間反応タイプ、明細化、相互作用、M反応におけるS-HTPP法の描画特徴ごとの口法反応の平均出現率の差異の検討結果を示す。

(1) 人間反応タイプ

S-HTPP法の人物像の特徴と口法の人間反応の関連を表5に示す。「横向き」の同性像・異性像を描く者は、「正面向き」を描く者より、Hの出現率が高かった。また、「横向き」の異性像を描く者は、「正面向き」を描く者より、H合計の出現率が高かった。「横向き」は自己信頼感や適応的な自己愛を指す(近藤, 2009b)。一方、Hは人間に対する感受性、共感性、受容する能力を指しており(片口,

表5 S-HTPP 法の人物像の特徴と口法の間人反応タイプの出現率および統計処理結果

S-HTPP 法	n	H		Hd		口法 (H)		(Hd)		H 合計		
		Mean	統計量	Mean	統計量	Mean	統計量	Mean	統計量	Mean	統計量	
表情 (同性像)	笑顔	19	11.2	8.8		5.8		5.4		31.1		
	非笑顔	8	11.3	0.0	10.9	1.9	4.7	1.2	2.8	0.9	29.7	0.1
	空白の表情	9	11.0		6.9		5.7		5.0		28.6	
表情 (異性像)	笑顔	24	12.1		9.4		5.7		4.9		32.1	
	非笑顔	4	10.5	0.5	12.4	1.6	4.3	0.5	1.8	1.4	28.9	0.3
	空白の表情	8	10.3		7.8		5.4		4.6		28.0	
表情 (同性像 - 異性像)	笑顔 - 笑顔	19	11.2		8.8		5.8		5.4		31.1	
	非笑顔 - 笑顔	4	12.0		9.4		5.2		3.9		30.5	
	非笑顔 - 非笑顔	4	10.5	0.4	12.4	1.9	4.3	0.7	1.8	1.5	28.9	0.2
	空白の表情 - 空白の表情	8	10.3		7.8		5.4		4.6		28.0	
顔の向き (同性像)	正面向き	25	10.6	30.5*	10.6		5.0		4.1		30.2	
	横向き	6	19.2	> *	5.5	42.5	8.2	55.0	4.3	56.0	37.2	53.0
顔の向き (異性像)	正面向き	24	9.9	42.0**	9.4		5.0		4.3		28.7	56.5*
	横向き	9	18.9	> **	9.8	103.5	7.3	77.5	4.0	94.0	39.9	> *
顔の向き (同性像 - 異性像)	正面向き - 正面向き	23	9.6	21.5*	9.7		5.1		4.4		28.9	
	横向き - 横向き	5	19.8	> *	6.2	40.5	9.3	34.5	4.7	42.5	39.9	31.5
視線	対面	5	19.3	10.5*	11.5		11.1		0.9		42.8	
	同方向	22	9.7		9.9		4.1		5.2		28.8	
	別方向	4	19.1	> , *	5.6	3.7	7.4	4.6	4.2	5.6	36.3	5.7
	視線なし	6	7.7	> , *	6.6		5.3		5.7		25.3	
身体接触	手をつなぐ	11	10.8	138.0	7.6		3.4	90.0+	5.4		27.2	
	接触なし	26	12.0		9.7	121.0	6.5	> *	4.3	114.5	32.5	108.0
人物像の表現様式	普通の人間	32	12.3	37.0	9.4		5.5	43.0	4.5	50.0	31.7	44.0
	棒人間	4	6.7		5.3	40.0	6.3		5.7		24.0	
関係性	夫婦・恋人	25	11.5		7.1	6.3*	4.7	4.9+	5.3		28.6	
	友達	6	11.9	0.1	12.3		7.1		4.9	2.3	36.3	3.8
	きょうだい	3	11.5		14.7	> *	12.9	> *	1.2		40.3	
人物像の相互作用	相互的	27	12.4	5.9+	8.8		5.7		4.8		31.7	
	アンビヴァレント	3	16.9	> *	6.1	1.5	8.4	1.0	5.9	1.7	37.3	2.5
	相互作用なし	4	4.4	> *	11.2		3.4		3.4		22.4	

2 項目の比較には Mann-Whitney 検定を用いた。3 項目以上の比較には Kruskal-Wallis 検定を、残差分析に Mann-Whitney 検定を用いた。

統計量の値は、3 項目以上の場合、Kruskal-Wallis の H 値、2 項目の場合、Mann-Whitney の U 値を表記している。

+p<.10, *p<.05, **p<.01

1987)、この結果は「横向き」の解釈仮説を支持するものである。

同様に、2 人が向かい合う「対面」を描く者は、「同方向」と「視線なし」とする者より、H が多いと示された。「対面」は適応的な対象関係を反映する (馬場, 2005 ; 近藤, 2009b)。「対面」は、男女が「横向き」でなければ成り立たない描画表現であり、そのため「横向き」と同様の結果が得られた。2 人が向かい合う人物像には、描き手の人間への関心の高さや、積極的に人と関わろうとする姿勢が印象として感じられる。

一方、男女が別々の方向を向く「別方向」を描く者は、「同方向」と「視線なし」を描く者より、H

の平均出現率が有意に高く、「対面」と同じ結果になった。「対面」と「別方向」は、一方は男女が向き合って何らかの相互作用があると印象付けられ、もう一方では、男女が視線を外し、何も相互交流が行われなると印象付けられる表現で、両者の特徴は、まったくの正反対である。これは何を意味するのであろうか。片口 (1987) は、人間反応は、他人に関する関心や感受性を反映するが、H が多すぎることは、対人関係において自意識が過剰で、過敏であることを示すと述べている。このことから、「対面」と「別方向」の描画特徴の背景には、対人関係における敏感さがあり、「対面」と「別方向」の違いは、その方向性の違いを表しているのではないかと考え

られる。つまり、他者に関する感受性が高いため、「対面」を描く者の場合は、他者の考えや反応を気にする他者依存的な傾向があり、「別方向」を描く者の場合は、他者に接近せず、相互交流を回避する傾向があると言える。

「身体接触」において、「接触なし」とする者は、「手をつなぐ」を描く者より、(H)の出現率が高かった。「身体接触」は、他者や環境への接触手段を表す(Leibowitz, 1999/2002)。一方、(H)は、他人に対する関心や感受性を反映するが、現実の対人関係を避け、空想的な世界に逃避する傾向を指すと言われている(片口, 1987)。つまり、他者への希求と他者からの逃避の2つの意味が含まれている。このことから「接触なし」は、他者に関心を示すが、実際の関係構築には至らないことを示していると考えられる。しかし「接触なし」は、調査協力者の70.3%が該当する出現頻度の高い描画表現である。身体接触のもつ意味は、描かれた人物がどのような関係性なのかに依存するため、実際の解釈では、他の描画特徴を含めて行うべきである。

描いた男女の関係性を「きょうだい」と言及する者は、「夫婦・恋人」とする者より、Hdと(H)が多かった。「関係性」は、自身の描いた男女像に、何らかの関係付けを行うものであり、描き手にとって最も親和的な関係性が投射される。近藤(2009a)は、他者との相互交流に自信がある者ほど、「夫婦・恋人」と言及し、そうでない者ほど「知り合い・近所の人」と言及する傾向にあると報告している。一方、Hdは多い場合、成熟した人間関係を持ち得ないことが多々あり、(H)の多さは対人関係における逃避傾向を指すとされる(片口, 1987)。一般に青年期の男女にとって、「きょうだい」は、決してつながりの希薄な関係性ではないが、「夫婦・恋人」ほど密ではない。「夫婦・恋人」より「きょうだい」で、Hdと(H)が多いという結果は、「関係性」の解釈仮説を支持するものである。しかし、「きょうだい」に該当する者は3名しかおらず、今後、調査協力者を増やし、「関係性」のもつ意味を明確化する必要があると考えられる。

同性像と異性像とのあいだでどのような交流が行われているかについて、「相互的」と「アンビヴァレント」と言及した者は、「相互作用なし」と言及した者より、Hの出現率が多かった。「相互的」と「アンビヴァレント」は、内容が異なっても、何らかの相互作用が認められるが、「相互作用なし」で

は、相互作用が何も言及されない。つまり、何らかの相互作用があるとの説明は、他者への興味関心を表し、「相互作用なし」は、他者への関心の低さの表れであると言える。しかし近藤(2009b)は、「相互作用なし」について、他者にも自己にも執着せず、安定して自己を保てる状態を指すと報告しており、複数の反応間で相互作用が説明されないことは、特に不適応を示唆するものではないと言える。

(2) 人間反応の明細化

S-HTPP法の人物像の特徴と口法の人間反応の明細化の関連を表6に示す。「表情」において、「空白の表情」の同性像を描く者は、「非笑顔」を描く者より、口法の人間反応に、性別や年齢などの明細化を複数する傾向にあった。「空白の表情」は、人との接触に臆病で、防衛的態度や感情表現の抑制の表れである(高橋, 1974; 近藤, 2009a)。一方、人間反応の明細化は、対人認知の繊細さや適切さを表すとされる(高瀬, 2005)。この結果は何を示すのであろうか。口法反応と描画表現とでは、生成過程の性質が異なっている。口法では、言葉で反応を示すため、それが何を意味するのか被検者自身が気づきにくい。描画法では、他者から容易に理解可能な視覚的反応として描写されるため、描画表現は、口法反応より「検査者の存在」を意識した反応であるといえる。そのため、本研究の「空白の表情」を描く者は人間反応の明細化が多いという結果は、一見、相反するものに見えるが、繊細な対人認知をもつがゆえに、他者の視線・存在を強く意識してしまって自分を表現できないという対人関係パターンを表現しているのではないかと考えられる。また反対の結果を示した「非笑顔」を描く者は、他者の視線・存在を意識せずに自己中心的に対人行動する傾向があると言えるのかもしれない。これは、「非笑顔」は自己愛的傾向と関連するという知見(近藤, 2009b)を支持するものである。

「視線」においても、「視線なし」を描く者は、「同方向」を描く者より、複数の明細化をする傾向が認められた。「視線なし」は、表情が空白などのため、視線が判別できない描画が多く含まれており、「空白の表情」と関連の強い描画特徴であるため、「空白の表情」と同じ結果が得られた。

上記の結果以外に有意差の得られた項目はない。明細化は、対象関係の認知面を表す指標である。S-HTPP法に表れる対象関係は、認知面よりも情緒

表 6 S-HTPP 法の人物像の特徴と口法の人間反応の明細化の出現率および統計処理結果

S-HTPP 法	n	口法														
		性別		年齢		社会的属性		衣類・髪型・体型		性格		言及なし		複合		
		Mean	統計量	Mean	統計量	Mean	統計量	Mean	統計量	Mean	統計量	Mean	統計量	Mean	統計量	
表情 (同性像)	笑顔	19	2.7		3.2		3.1		2.8		2.9		2.9		13.5	5.8 ⁺
	非笑顔	8	1.2	3.3	2.0	1.2	1.7	4.1	1.7	3.7	0.7	3.0	3.0	2.6	5.5	> *
	空白の表情	9	2.9		1.8		2.6		3.1		3.4		1.7		13.9	> *
表情 (異性像)	笑顔	24	3.0		3.0		3.0		2.7		2.8		3.1		12.3	
	非笑顔	4	1.0	3.0	3.0	0.5	1.1	4.3	1.8	2.3	0.7	2.3	2.6	0.6	5.8	2.7
	空白の表情	8	3.1		2.0		2.8		3.1		3.8		1.9		13.5	
表情 (同性像 - 異性像)	笑顔 - 笑顔	19	2.7		3.2		3.1		2.8		2.9		2.9		13.5	
	非笑顔 - 笑顔	4	1.4		1.0		2.3		1.7		0.7		3.5		5.1	5.3
	非笑顔 - 非笑顔	4	1.0	3.8	3.0	1.6	1.1	5.1	1.8	3.6	0.7	3.7	2.6	2.7	5.8	
	空白の表情 - 空白の表情	8	3.1		2.0		2.8		3.1		3.8		1.9		13.5	
顔の向き (同性像)	正面向き	25	3.0		2.9		2.6		2.6		2.6		3.2		10.9	64.5
	横向き	6	1.4	58.0	2.0	64.5	2.9	65.5	2.5	67.0	1.9	67.0	2.3	74.0	12.6	
顔の向き (異性像)	正面向き	24	2.7		2.8		2.6		2.5		2.4		3.0		10.7	76.0
	横向き	9	3.0	104.0	2.7	100.5	2.4	106.5	3.1	80.0	2.5	104.0	2.5	103.0	14.2	
顔の向き (同性像 - 異性像)	正面向き - 正面向き	23	2.7		2.8		2.6		2.4		2.4		3.0		10.8	46.0
	横向き - 横向き	5	1.1	40.0	1.6	44.5	3.1	46.5	2.4	52.5	1.7	47.5	2.2	55.0	13.7	
視線	対面	5	5.1		4.0		2.7		3.6		1.7		2.6		20.0	6.6 ⁺
	同方向	22	2.2		2.4		2.7		2.3		2.3		3.2		8.7	
	別方向	4	1.7	5.2	3.0	1.0	1.4	3.4	2.8	5.1	2.8	4.9	2.4	2.5	14.8	> *
	視線なし	6	3.2		2.7		3.5		3.3		5.1		1.1		15.7	> *
身体接触	手をつなぐ	11	2.2		1.8		3.0		2.6		2.3		3.5		9.2	107.5
	接触なし	26	2.9	138.5	3.1	124.5	2.6	124.5	2.7	132.0	2.9	135.5	2.4	120.5	13.2	
人物像の表現様式	普通の人間	32	2.6		2.6		2.6		2.6		2.4		3.0		11.2	
	棒人間	4	3.1	37.0	2.0	62.0	3.8	41.5	3.3	43.5	4.9	37.0	1.0	34.0	16.2	31.5
関係性	夫婦・恋人	25	2.3		2.4		2.8		2.5		2.9		2.4		11.0	
	友達	6	3.9	1.2	2.7	0.8	3.3	1.2	3.4	0.1	3.7	2.6	4.2	1.4	11.6	1.2
	きょうだい	3	3.6		4.0		2.1		2.8		0.0		1.9		23.3	
人物像の相互作用	相互的	27	3.1		2.8		2.8		2.8		2.5		2.8		12.4	
	アンビヴァレント	3	2.7	2.0	5.3	1.7	2.7	0.7	3.2	2.9	6.5	4.5	1.6	0.1	20.3	4.6
	相互作用なし	4	1.1		2.0		2.0		1.6		2.1		2.3		5.2	

2 項目の比較には Mann-Whitney 検定を用いた。3 項目以上の比較には Kruskal-Wallis 検定を、残差分析に Mann-Whitney 検定を用いた。

統計量の値は、3 項目以上の場合、Kruskal-Wallis の H 値、2 項目の場合、Mann-Whitney の U 値を表記している。

+ p < .10, * p < .05, ** p < .01

面を含んでおり (近藤, 2009ab), そのため両者の関連はあまりみられなかったと考えられる。

(3) 人間・動物反応の相互作用

S-HTPP 法の人物像の特徴と口法の人間・動物反応の相互作用の関連を表 7 に示す。「表情」について、「非笑顔」の異性像、「非笑顔」の同性像と異性像を描く者は、他の項目より、「相互作用なし」が有意に多かった。「相互作用なし」は、口法のインクプロットに対して、何も相互作用のない複数の反応を見出すことであり、具体的な例を示すならば、「人が 2 人、岩を登っている」や「熊が 2 匹歩いている」といった反応が該当する。この反応は、相互

作用が認められないが、2 者の人間・動物が認知される反応である。インクプロットという中立的な刺激に、人間および動物を認知するには、ある程度の人間に対する興味関心と共感性が必要である。そこに相互作用を認めるには、それらの能力がさらに必要になる。つまり、2 者をみながら相互作用が付加されない反応は、ある程度の人への興味関心と回避的態度を表していると言えるのかもしれない。S-HTPP 法の「非笑顔」は、笑顔のように肯定的な感情が表現されず、無表情で描かれることが多いが、中身が省略された空白の表情でもなく、このような特徴をもつ「非笑顔」は、ある程度の強さの他者への興味関心を表すと言える。

表7 S-HTPP法の人物像の特徴と口法の間・動物反応の相互作用の出現率および統計処理結果

S-HTPP法	n	口法										
		Activeな相互作用		Passiveな相互作用		攻撃・敵意・損傷		相互作用なし		鏡映反応		
		Mean	統計量	Mean	統計量	Mean	統計量	Mean	統計量	Mean	統計量	
表情 (同性像)	笑顔	19	7.9		3.4		1.7		7.3		0.8	
	非笑顔	8	7.2	0.0	3.6	0.6	0.3	2.9	9.8	2.3	1.6	0.8
	空白の表情	9	7.4		3.2		0.4		6.9		1.7	
表情 (異性像)	笑顔	24	7.8		3.4		1.5		7.3	7.7*	0.8	5.6*
	非笑顔	4	7.9	0.1	4.0	1.7	0.0	3.1	13.6		3.1	> *
	空白の表情	8	7.3		3.5		0.5		4.7	> , *	0.8	> *
表情 (同性像 - 異性像)	笑顔 - 笑顔	19	7.9		3.4		1.7		7.3	7.9*	0.8	7.3*
	非笑顔 - 笑顔	4	6.6	0.1	3.1		0.6		6.0		0.0	
	非笑顔 - 非笑顔	4	7.9		4.0	2.0	0.0	3.1	13.6		3.1	> , *
	空白の表情 - 空白の表情	8	7.3		3.5		0.5		4.7	> , , *	0.8	> *
顔の向き (同性像)	正面向き	25	7.4	61.5	3.6	75.0	0.8	52.5	7.9	66.5	0.9	49.5
	横向き	6	10.0		3.6		2.9		9.0		2.7	
顔の向き (異性像)	正面向き	24	7.8	99.5	3.6	103.5	0.8	84.0	7.9	102.5	0.7	61.0*
	横向き	9	8.9		3.4		2.4		9.5		3.2	> *
顔の向き (同性像 - 異性像)	正面向き - 正面向き	23	7.7	50.5	3.7	51.5	0.8	45.0	8.1	46.5	0.8	30.0
	横向き - 横向き	5	10.1		4.4		3.0		9.9		3.2	
視線	対面	5	14.1	6.3*	8.2	8.7*	0.5		8.9	6.7*	3.2	
	同方向	22	6.8		2.9		0.9	1.9	8.2		1.0	5.4
	別方向	4	7.6	> *	0.0	> *	3.7		12.1	> , *	2.1	
	視線なし	6	5.6		3.6	, , > *	0.7		3.2	> , *	0.0	
身体接触	手をつなぐ	11	6.7	120.0	3.2	135.5	0.9	130.0	5.7	101.0	0.9	137.5
	接触なし	26	8.1		3.5		1.2		8.8		1.4	
人物像の表現様式	普通の人間	32	8.0	39.5	3.3	55.0	1.2	46.0	8.5	33.0	1.5	44.0
	棒人間	4	4.2		3.8		0.0		4.8		0.0	
関係性	夫婦・恋人	25	7.5		2.6		1.3		8.2		1.3	
	友達	6	6.7	2.0	2.9	4.1	0.6	1.6	8.8	0.7	1.3	0.1
	きょうだい	3	13.0		8.9		0.0		9.4		2.1	
人物像の相互作用	相互的	27	8.4		4.0		0.9	4.9*	8.4		1.6	
	アンビヴァレント	3	9.8	3.0	2.1	0.5	5.5		6.3	1.0	0.0	1.6
	相互作用なし	4	3.2		2.2		0.0	> , *	7.8		0.7	

3項目以上の比較には Kruskal-Wallis 検定を、残差分析に Mann-Whitney 検定を用いた。2項目の比較には Mann-Whitney 検定を用いた。

統計量の値は、3項目以上の場合、Kruskal-Wallis の H 値、2項目の場合、Mann-Whitney の U 値を表記している。

+p<.10, *p<.05

また、「非笑顔」を描く者は、鏡映反応が多く出現する傾向も認められた。「湖面に映る、歩いている熊」といった鏡映反応は、2者の反応のようであるが、実体は1者であり、mirroringの表現であることから、自己没入や自己中心性の指標とされる(Exner, 1986/1991; 藤田, 1996)。これは、ナルキッソスが水面に映る自分に恋をするというギリシア神話に由来する。「非笑顔」は、自己愛的傾向との関連が見出されており(近藤, 2009b)、本研究の結果は、両者が関連する指標であることを示唆している。

「顔の向き」について、「横向き」の異性像を描く者は、「正面向き」を描く者より、鏡映反応の出現

率が高いと示された。「横向き」は、相手と視線を合わせるほか、視線を逸らす表現でもあり、相手の視線との組み合わせで、解釈仮説が大きく変化する。しかし「顔の向き(同性像 - 異性像)」と「視線」で、鏡映反応に関する有意な結果が示されておらず、この結果が何を意味するか、さらなる検討が必要である。

「対面」は、男女が向かい合う、密な相互関係の描画表現である。この「対面」の人物像を描く者は、他の項目を描く者より、口法で複数の反応間に、Active もしくは Passive な相互作用をみることが多かった。特に、「2人は踊っている」といった Active な相互作用の出現率が顕著に高かった。

表 8 S-HTPP 法の人物像の特徴と口法の M 反応の出現率および統計処理結果

S-HTPP 法	n	Active		口法 Passive		M 合計	
		Mean	統計量	Mean	統計量	Mean	統計量
表情 (同性像)	笑顔	19	16.2	8.5		25.0	
	非笑顔	8	12.5	6.8	2.2	19.5	0.7
	空白の表情	9	13.2	6.4		19.8	
表情 (異性像)	笑顔	24	16.1	8.8	7.9*	25.4	
	非笑顔	4	15.5	4.0		19.6	1.1
	空白の表情	8	12.8	6.4	> **	19.8	
表情 (同性像 - 異性像)	笑顔 - 笑顔	19	16.2	8.5	8.3*	25.0	
	非笑顔 - 笑顔	4	9.5	10.6		19.4	
	非笑顔 - 非笑顔	4	15.5	4.0		19.6	0.8
	空白の表情 - 空白の表情	8	12.8	6.4	> *	19.8	
顔の向き (同性像)	正面向き	25	14.8	7.8		23.0	
	横向き	6	21.1	9.4	44.0	29.4	37.0
顔の向き (異性像)	正面向き	24	13.6	7.9		21.8	
	横向き	9	23.2	8.3	64.5	32.6	35.0
顔の向き (同性像 - 異性像)	正面向き - 正面向き	23	13.6	7.8		21.6	
	横向き - 横向き	5	22.8	9.4	36.0	30.7	27.0
視線	対面	5	23.0	10.9		33.9	7.4*
	同方向	22	13.5	7.3		20.6	
	別方向	4	22.7	7.9	4.1	36.9	
	視線なし	6	10.6	5.4		16.4	> *
身体接触	手をつなぐ	11	13.5	6.6		19.2	
	接触なし	26	16.1	8.2	93.0	25.4	71.0
人物像の表現様式	普通の人間	32	16.0	7.9		24.2	
	棒人間	4	9.1	6.0	26.0	15.3	21.5
関係性	夫婦・恋人	25	15.0	7.2		22.3	
	友達	6	14.0	8.0	0.1	23.2	2.1
	きょうだい	3	22.8	8.9		31.7	
人物像の相互作用	相互的	27	15.6	8.7		24.7	
	アンビヴァレント	3	23.7	5.0	6.1*	28.7	3.7
	相互作用なし	4	10.4	4.3	> *	14.7	

2 項目の比較には Mann-Whitney 検定を用いた。3 項目以上の比較には Kruskal-Wallis 検定を、残差分析に Mann-Whitney 検定を用いた。

統計量の値は、3 項目以上の場合、Kruskal-Wallis の H 値、2 項目の場合、Mann-Whitney の U 値を表記している。+ $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

Active な相互作用は、健常群で多い、健康的な対象関係を示唆する反応であり (高瀬, 1999), 「対面」で他の項目より、Active な相互作用が多いという結果は、「対面」が適応的な対象関係を表すということが言える。また同時に、相互作用のない複数の人間・動物反応の出現率も高かった。相互作用の有無に関わらず、複数の人間・動物反応を認めるには、ある程度の人間に対する興味関心と共感性が必要である。この結果は、「対面」が適応的な対象関係を表すという本研究の結果を支持するものと言える。

「人物像の相互作用」を「アンビヴァレント」と言及する者は、他の項目を言及する者より、口法の反応間に攻撃、敵意、損傷の意味を含んだ関係付け

をする傾向が多かった。具体例には、「騎士が剣をとりあって血を流しながら闘っている」といったものがある。MOAS では、このような反応は、病理的・不適応的な対象関係と評定される。否定的な感情や葛藤的な相互作用が語られる「アンビヴァレント」は、それがそのまま心的状態を反映しており (近藤, 2009b), 本研究の結果はこれを支持するものである。

(4) 人間運動反応

S-HTPP 法の人物像の特徴と口法の M 反応の関連を表 8 に示す。「表情」について、「笑顔」の異性像を描く者は、「非笑顔」を描く者より、Passive

な M 反応の出現率が高かった。また、同性像と異性像の組み合わせでも、同様の傾向が認められた。有意な差異は確認されていないが、同性像の Active, Passive, M 合計, 異性像の M 合計など「表情」全体にわたって、「笑顔」と M 反応との関連が示唆された。M 反応は、対象関係、共感性、想像力などと関連し、一般に望ましいパーソナリティ指標と理解されている(片口, 1987)。この結果は、適応的な指標であるとの「笑顔」の解釈仮説を支持するものである。

「顔の向き」について、「横向き」の異性像を描く者は、「正面向き」を描く者より、Active の出現率が高かった。同様の傾向は、「顔の向き」全体に言える。「横向き」は、自己信頼感と関連する指標であり(近藤, 2009b)、先行研究を支持する結果といえる。

「視線」について、「対面」と「同方向」を描く者は、「視線なし」とする者より、M 合計の出現率が高かった。有意差は得られていないが、「別方向」も、他の項目より平均値が高かった。これらの結果は一貫性に欠けているようである。しかし、「対面」と「同方向」、「別方向」は、「視線なし」のように顔が空白ではなく、目、鼻、口などの特徴の描かれる描画表現である。これと M 反応との関連から、顔の特徴の描写が、健康的な対象関係を考える上での重要な指標になると考えられた。

「人物像の相互作用」について、「相互的」と言及する者は、「相互作用なし」とする者より、Passive な M 反応の出現率が高かった。「相互的」は、適応的で相互性のある人物像表現であり、これと M 反応との関連は、先行研究の知見を支持するものと言える。

3. まとめと今後の課題

近藤(2009ab)は質問紙を用いて、S-HTPP 法の人物像表現に投射される人格的側面について検討し、いくつかの解釈仮説を考察した。今回、より深い意識水準のアセスメントが可能であるとされる口法を用いて解釈仮説を検討した。その結果、特に人間反応タイプ、相互作用、M 反応において、いくつかの有意な知見が示された。この結果は、おおむね先行研究の知見を肯定するものである。

しかし、本研究にはいくつかの問題点がある。一つは、本研究が健常者を対象にしているということである。本研究の調査協力者が健常者である限り、

病態水準で描画特徴がどのように違い、それぞれの群において固有の人格特徴がどのように表現されるかについては未知数である。一方で、健常者の描画表現を十分に検討することは、今後の調査協力者の拡大、臨床群への適用に向けての大きな礎になる。また、もう一つの問題点に、描画の微妙で繊細なニュアンスを無視しているということがある。数量的検討では必ず問題になることであるが、特に、個人の内的世界や情緒的体験が強く反映される描画法では大きな問題となる。過去に多くの研究が、一般性と個人性を統合する試みを行ってきた。一般性の把握は、個人理解の物差しになっても、それで個人を理解したとは言えない。個人性の理解には、非数量的データが不可欠となる。数量的データに非数量的データの検証を経ることで、解釈仮説の有用性は高まるであろう。今後、質的な検討や事例を用いた検討を行い、この課題に取り組む必要がある。

引用文献

- 安藤 治 (1990) : 人物二人法 他者表現の治療的機能 芸術療法, 21(1), 46-54.
- 馬場史津 (2005) : 母子画の基礎的・臨床的研究 北大路書房
- Berg JL, Packer A & Nunno VJ (1993): A Rorschach analysis: Parallel disturbance in thought and in self/object representation. *Journal of Personality Assessment*, 61(2), 311-323.
- Blatt S, Brenneis C, Schimek J & Glick M (1976): Normal development and psychopathological impairment of the concept of the object on the Rorschach. *Journal of Abnormal Psychology*, 85(4), 364-373.
- Blatt S & Lerner H (1983): The psychological assessment of object representation. *Journal of Personality Assessment*, 47(1), 7-28.
- Bochner R & Halpern F (1945): The clinical application of the Rorschach test. New York: Grune & Stratton.
- Bonifacio PP & Schaefer CE (1969): Creativity and the projection of movement responses. *Journal of Projective Techniques & Personality Assessment*, 33(4), 380-384.
- Exner JE (1986): The Rorschach: A comprehensive system. Volume 1: Basic foundations (2nd ed.). New York: John Wiley. 高橋雅春・高橋依子・田中富士夫 (監訳) (1991) : 現代ロールシャッハ体系(上) 秋谷たつ子・空井健三・小川俊樹 (監訳) (1991) : 現代ロールシャッハ体系(下) 金剛出版
- 藤田宗和 (1996) : Fr (反射反応)と自己愛 学苑, 673, 55-65.
- Gillespie J (1994): The projective use of Mother-And-

- Child Drawings: A manual for clinicians. New York: Brunner/Mazel. 松下恵美子・石川 元 (訳) (2001): 母子画の臨床応用 対象関係論と自己心理学 金剛出版
- Goddard R & Tuber S (1989): Boyhood separation anxiety disorder: Thought disorder and object relations psychopathology as manifested in Rorschach imagery. *Journal of Personality Assessment*, 53(2), 239-252.
- Hammer EF (1969): Hierarchical organization of the personality and the H-T-P, achromatic and chromatic. Buck JN & Hammer EF (Eds) *Advances in the house-tree-person technique: variations and applications*. Los Angeles: Western Psychological Services, pp 1-37.
- Harder DW, Greenwald DF, Wechsler S & Ritzler BA (1984): The Urist Rorschach Mutuality of Autonomy Scale as an indicator of psychopathology. *Journal of Clinical Psychology*, 40(4), 1078-1083.
- 藤山直樹 (2002): 対象関係 小此木啓吾・北山 修 (編) *精神分析辞典* 岩崎学術出版社 pp 315-316.
- 井梅由美子 (2001): 青年期・成人期を対象とした対象関係尺度作成の試み *人間文化論叢*, 4, 311-319.
- 片口安史 (1987): 新・心理診断法 ロールシャッハ・テストの解説と研究 金子書房
- 近藤孝司 (2008): S-HTPP (Synthetic House Tree Person Person test) の基礎的研究 中京大学心理学部紀要, 8(1), 31-39.
- 近藤孝司 (2009a): 描画法による対象関係のアセスメント S-HTPPにおける, 描かれた人物像の相互作用の検討 *臨床描画研究*, 24, 146-162.
- 近藤孝司 (2009b): S-HTPP法における自己愛の諸相 人物像の描画表現についての自己心理学からの理解 *心理臨床学研究*, 27(3), 333-343.
- Leibowitz M (1999): *Interpreting projective drawings: A self psychological approach*. Philadelphia: Brunner/Mazel. 菊池道子・溝口純二 (訳) (2002): 投射描画法の解釈 家・木・人・動物 誠信書房
- Lerner H (1983): An object representation approach to psychostructural change: A clinical illustration. *Journal of Personality Assessment*, 47(3), 323-331.
- Lerner H & St Peter S (1984): Patterns of object relations in neurotic, borderline and schizophrenic patients. *Psychiatry*, 47(1), 77-92.
- Machover K (1949): *Personality projection in the Drawing of the Human Figure: A method of personality investigation*. Charles C Thomas Publisher. 深田尚彦 (訳) (1984): 人物画への性格投影 黎明書房
- 三上直子 (1995): S-HTP法 統合型HTP法による臨床的・発達のアプローチ 誠信書房
- Ryan RM, Avery RR & Grolnick WS (1985): A Rorschach assessment of children's mutuality of autonomy. *Journal of Personality Assessment*, 49(1), 6-12.
- Spear WE & Lapidus LB (1981): Qualitative differences in manifest object representations: Implications for a multidimensional model of psychological functioning. *Journal of Abnormal Psychology*, 90(2), 157-67.
- Stuart J, Western D, Lohr N, Benjamin J, Becker S, Vorus N & Silk K (1990): Object relations in borderlines, depressives, and normals: An examination of human responses on the Rorschach. *Journal of Personality Assessment*, 55(1), 296-318.
- 高橋雅春 (1974): 描画テスト入門 HTPテスト 文京書院
- 高瀬由嗣 (1999): ロールシャッハ人間反応と精神病理 ロールシャッハ法研究, 3, 24-36.
- 高瀬由嗣 (2005): ロールシャッハ・テストの人間反応にみる精神病理の特徴 北海道医療大学心理科学部研究紀要, 1, 1-10.
- Tuber S & Coates S (1989): Indices of psychopathology in the Rorschachs of boys with severe gender identity disorder: A comparison with normal control subjects. *Journal of Personality Assessment*, 53(1), 100-112.
- 角田陽子・小川俊樹 (2005): 認知的・情緒的共感とロールシャッハ・テストの人間運動反応との関連 筑波大学心理学研究, 29, 117-124.
- Urist J (1977): The Rorschach test and the assessment of object relations. *Journal of Personality Assessment*, 41(1), 3-9.

(受理年月日 2012年8月30日)